



戦前中国の風俗絵はがきの世界 (近藤恒弘氏 寄贈)

支那民衆風俗 苦力の萬態

孫 安石 (非文字資料研究センター 研究員)



図1 支那民衆風俗 炎天の下 結氷の上 共に汗を流す
苦力の萬態



図2 満洲唯一の外出機關
PICTURE OF THE ONLY MACHINERY AT MANCHU.



図3 調子難し一輪車
PICTURE OF A WHEEL-BARROW AT MANCHU.



図4 黄塵の中に馬車を驅る苦力
PICTURE OF THE WORKING COOLIES IN DUST.

民俗の展望』、富山房、1936年、330頁）。

ところが、苦力の労働力に注目したのは、「支那通」だけではなく。例えば、貴島克己『満州の苦力』（南満州鉄道株式会社経済調査会、1933年）は、中国の東北部（旧満州）における苦力の意義、労働市場、その組織と年齢、そして、人数などについて詳細な検討を加えており、当時の満州における苦力の状況を理解する上で大いに参考になる。

それによれば、苦力の誕生は、そもそも労働者の移動に関わるもので、20世紀に入ると政治的、経済的、地理的、社会的な諸理由から漢族が中国の東北地域（満州）へ進出し始め、その数は1923年に凡そ43万人であったものが、1929年あたりには100万人を数えるほどに膨れ上がった、という。これらの労働者は永住を目的にした人もいたが、その大部分は出稼ぎ労働による収入の確保を目指したことになるから、ここで苦力問題が出てくるわけである。

「苦力」という言葉の由来については諸説ある。その中で最も有力な説は、英語のCoolie、またはCoolyの訳語に当たり、その英語も元来はインドのタミール語を起源とするという説である。このタミール語で「雇用」を意味する「クーリー」が19世紀には欧米人の間で定着し、のちに「苦力」という漢字が当てられ現在に至った、ということらしい。



図5
四十八貫の豆粕を擔ぐ苦力
PICTURE OF THE POWERFUL COOLIES AT MANCHU.
COOLIES AT MANCHU.



図6
水を運ぶ苦力の群
PICTURE OF THE COOLIES GROUP
ASIDE THE ROAD, MANCHU.



図7
晝食も簡にすまず苦力達
PICTURE OF THE COOLIES TAKING
HIS DENNER.



図8
建築に忙しい大工
PICTURE OF THE CARPENTER
BUILDING A HOUSE.



図9
炎天の下に働く苦力
PICTURE OF THE WORKING COOLIES
IN THE SUN.

満州における苦力とは、(1) 漢民族および満州族であること、(2) 不熟練労働者であること、(3) 他人が決定する労働に従事する賃金労働者であること、(4) 主として屋外の肉体労働に従事するものであることを指す場合が多く、朝鮮系の労働者が苦力の労働に従事しても苦力とは言わず、小作人や人力車夫は苦力の分類には入らないという。

満州における苦力の種類は、大きく分けて、①雑役苦力、②土木建築苦力、③採炭苦力、④採鉱苦力、⑤荷役苦力に大別され、①雑役苦力は官公署、会社、工場などの一般雑役に従事する苦力で、雇われた職場により、葬儀人夫、掃除人夫、除雪人夫などの名称が附せられた。

②土木建築苦力は、土砂の切り取り、運搬、トロ押し、大工、左官の手伝いなどの一般雑役に従事したが、満州では冬季は工事が中止になることから大部分の苦力は帰郷するか業態の異なる仕事を探すことになる。

⑤荷役苦力については、やや詳細が分かり、大連の荷役苦力の総数は1万9千人で、その70%が大連埠頭に集中しており、その種類は、さらに細かく、本船苦力、石炭苦力、陸上苦力（また、発送苦力、到着苦力、検斤苦力、馬車苦力、小車苦力、材木苦力、小口扱苦力、一車扱苦力などに分類）に分けられた（以上、貴島克己、前掲書より）。